慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	阿部寛之著, 『保険経済論』, 序三～四頁, 目次六頁, 本文一～二○七頁, 昭和三十四年十二月五日, 保険研究所, 三九○円
Sub Title	
Author	庭田, 範秋
Publisher	
Publication year	1961
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.3, No.6 (1961. 2) ,p.759- 763
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19610225-04044611

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

岡部寛之著『保険経済論』

保険経済学において、マルクス経済学的な研究が盛んであり、それが近代経済学的な研究に著しく先行したということは、きわめて興味ある事柄である。それは保険の経済的性格とマルクス経済学の学的性格との相互の事情からよるのであろうが、真の、現代の経済学に関する諸学会でいわれる意味での経済学としての保険経済学の、その発展の第一段階はマルクス経済学が果したということは、なにびとも必ず肯定するところであろう。

保険経済学においても、その経済的な諸理論が、現代の主流の、または有力なる学説のそれによっていなければならないことも、また自明のことわりであろう。保険経済学だけが、なにか独自な経済学によってなされることは許されない。そのような場合には、保険経済学が他のもろもろの経済学と理論的な相互関連をもちえず、かくて生れたその理論が広く経済社会の人々を説得するところの力を失い、その結果は、保険経済学がなんらの実践性をもちえなくなってしまうのである。かつまたそのような経済学であったなら、他のもろもろの経済学の分野での諸成果の吸収もきわめて困難であろう。同一の、あるいは関連ある学問的な方法、体系、分析、視角、接近、発想、用具でなされるからこそ、ここに統一性ある経済学の理論が確立されるし、発展もするのである。経済学の継子などという部門があってよいものではない。現代の大規模な、しかも錯綜した経済の実際社会は、保険をすらその重要な一環として、従ってそれを研究対象とする保険経済学も、他の経済学の諸部門と同じく、同一の、あるいは相関連する経済学の理論によってなされることを要求している。保険経済学は、経済理論としては他の経済学の諸部門のそれと同一のもので、それに保険の特殊性よりする特殊理論が加合せられたるもの、または保険の特殊性を他の経済学の諸部門の理論と同一のものでこれを摘出し追求したるものたるべきである。経済学の広さと深さが、保険経済学の広さと深さたるべきである。しかしてまた、保険経済学の理論的成果は、すなわち経済学の成果のうちに加算されなければならない。このことなくしては、保険の経済的分析は結実することなく、保険は経済の諸変動を正確かつ迅速に把握し反映し、また対処することもなくして、大にして急なる時代の潮流よりはずれて、なんら積極的なる機能を果しえずに、絶えず二流あるいは三流の地位に甘んずることとなる。

このことは経済の計画化の推進、国家あるいは政府の経済への干渉または積極的なる機能の増大の傾向のうちに、一段と強調さるべきところである。経済の計画化即社会主義化と解するがごとき程のものはこれをおく。経済政策の重要さは、最近の諸経済の等しくこれを認めるところである。かかる経済政策は経済の綜合的なる認識

の上に、それぞれの各経済部門の特殊性に応じて樹立され遂行されるものである。保険事業が経済的に発展すればするほど、経済社会に重要となればなるほど、保険に関する経済政策も問題化してくるはずである。ここにおいて保険経済学の確立ならびに発展が緊急事となってくるわけである。他の、広く諸経済政策との関連において、または経済の計画化のうちにあって、保険政策が十分なる考慮のもとに適切であり、重要視されるためには、万人を納得せしめるに足る保険の経済理論の存在が不可欠であろう。

これを要するに保険、保険企業、保険事業が、ますます発達して重要となればなるほど、経済社会でのその果す機能ならびに影響が広範囲に及び、そして複雑に深刻になるのである。他の諸経済制度との接触面も増大し、また経済社会の諸特性や趨勢とを無視してはありえなくなるのである。保険が独自の殻の中にあって、小さくまた独善的に存続し、従ってまた保険学がその殻の中でのみ特殊性と独立性に酔い溺れていてはいけないと思う。ここに保険経済学は、近代保険学またはマルクス経済学の二大思潮のいずれかのものとしてあらねばならぬことが分明となろう。

わが国での真の意味の保険経済学の道を正したものは、それは間違いなくマルクス経済学である。マルクス経済学の、保険経済学におけるこの功績は、正しく認識せらるべきである。しかしてマルクス経済学が、保険経済学において、かかる濫觴としての役割りを果しえたのは、主としてその学的性格によることは、また確かである。マルクス経済学は、時には広義において社会学的なる経済学、社会学的経済学の一として数えうべきものとされ、また巨視的な動態論的理論として特色づけられている。経済的な社会構造の発展を一の自然史的過程と解し、資本制生産様式全体の運動を法則的に把握しようとしているのである。それは社会の経済問題の各部に、連鎖系統的に理論が展開していく。しかして保険は偶然の災害に対する一種の制度であって、それは偶然の災害の予防、鎮圧の後に続く、実に善後策としてのそれである。従って社会経済に働きかける直接的・積極的要因は少ない。かかる性格の保険にも、もれなく研究の触手を向ける経済学は、まずマルクス経済学が一番向いていたと云える。そしてその前身である古典学派の時代から、たとえ不充分ではあっても保険の経済理論を記述し続けてきたのは、一般には社会経済学と称せられてきた一連の経済学派であり、そのうちのきわめて有力なるものとしてのマルクス経済学が、時到って保険経済学の礎石を築いたことは当然の成行きなのであった。わが国のごとく、経済的諸矛盾が尖鋭にまた複雑に、社会のあらゆる部面において深刻化している場合には、革命的情熱をもつ実践的意欲の強いマルクス経済学が高く評価されるのは故あることであって、各国国際間でマルクス経済学的な保険経済学が、もっとも高水準に発達している国、それはわが国なのである。

岡部寛之博士の著、本書「保険経済論」は、前作「保険学新講」（昭和三十一年三月十日　保険研究所）の続篇であり、前作がマル

クス経済学による保険経済学の最初の書物として学問的に位置づけられるのにつれて、本書はそれの姉妹篇となるものである。「前著『保険学新講』において叙述した理論をさらに一層ほりさげて検討し発展せしめたものである。これによってどうやら保険論を経済学の一分野としての保険学の地位にまで引き上げることが出来たと自負している」（序一頁）と。本書に対する著者の力の入れようがうかがえよう。

本書は、保険の経済的諸現象または経済的諸現象裏における保険の実体や機能について、相当広範囲に触れるところの書物である。保険資本の性格を貨幣取引資本と明確に把握し、保険資本の運動形態の分析よりその研究を始めている。流通費用、予備貨幣、社会的予備なる諸問題を保険資本との関連においてとらえんとしていることは、マルクス経済学としての方法論には合致するものである「保険本質論の展開」（三～一六頁）。「再生産と保険」（一七～二六頁）、「国民所得と保険」（二七～三七頁）の部分は、さらにさらに紙面を費して詳述を期待さるべきところであり、ここでは問題提起または素描をなされているのである。

「社会性保険論」（三八～四九頁）、つまり保険の社会性、経済に対する保険の在り方、社会性保険の方向等に関する諸理論は、やはり問題点の指摘としては有意義であるが、未だ社会性保険なる言葉ならびにその内容が一般化していないときには、果してどれほど社会一般に受け入れられるかは疑問である。「個人保険の社会主義的役割」（六一～七一頁）も同断である。

個人保険、社会保険、社会保障等の関係を経済理論的に追求し（七五～八八頁）、社会保障の本質（八九～九七頁）と社会保障の経済理論（九八～一〇九頁）を展開し、ソ連の社会保障（一一〇～一二〇頁）にまで及んでいる本書のこの部分は、著者が最近社会保障へ示した関心の結果であって、なかなかに多くの問題が盛り込まれている。

「保険政策の方向と限界」（一二三～一三三頁）なる本書のこの部分は、意欲的なまた新研究分野を拓くところのものである。問題点は確かに指摘せられている。これに続く「中小保険論」（一三四～一四七頁）、「生産性向上運動と保険」（一四八～一五八頁）、「国家独占資本主義と保険」（一五九～一七一頁）等の各部分も、鋭く現実を追求していて、今後の保険経済学の研究対象がなんであるか、その分析視角はいかにあるべきかなどの点について多くの示唆を与えている。

保険の史的研究にも手をのばされて、「保険経済史の在り方」（一七五～一八〇頁）を述べ、「保険資本の発生」（一八一～一九一頁）、「保険資本の発展」（一九二～二〇一頁）、「独占資本主義と保険」（二〇二～二〇七頁）と、主として保険資本の発生と発展の歴史的考察をなしているが、やはり保険経済史の一つの姿を示すものであろう。

本書の内容をかくのごとく通観してみると、保険経済学のほとん

どの問題点が網羅されていることがわかる。また一応マルクス経済学の方法と体系ならびに発展傾向に則って、それらが順に応じて叙述せられているを見る。きわめて大胆に、おおまかにではあるが、われわれはここにマルクス経済学的な保険経済学の輪郭をつかみえるのである。思うに著者岡部博士の研究者としての特徴は、「専ら自説の展開にのみ重点をおき、その構想、内容においてかなり大胆な見解を展開」（序三頁）すると自らもせられているところそのものと見受けられる。まことに本書は、保険学の「大体の構想」（序三頁）を打ちたてられた点に最大の特徴を見出さるべきものである。当面せる現代資本主義の分析に努めて、現代の保険理論を概説せる、マルクス経済理論による保険経済学速成の功は、著者岡部博士が受けるべきものであろう。

本書は「第二篇　社会保障の理論」の部分はもちろんであるが、全篇にわたって社会保障の研究がなされている。最近著者が各方面の雑誌に、社会保障に関する論文を多く掲載されていることから、著者の学問的関心が社会保障に傾きつつあると認められる。著者は本書において、社会保険の保険学的考察を多く行なっているのであり、この点がまた読者の関心を引くところとなろうが、社会保険と生命保険の関係、資本主義経済が独占段階に到達したる際の、社会保険の、または社会保障の諸機能、それの保険の側よりする考察、さらには保険政策論の立場から社会保障の問題を追求したる点、また保険発達史の最終段階において社会保障が主として取上げられているところ、保険の諸性格ならびに諸機能がその発達過程において変化と追加をみて、これが社会保険ならびに社会保障といかに関連づけて説かれているか、これらが本書における社会保険と社会保障の研究の主要なるものであるが、なかなか興味深い。

ところで著者は本書において、社会保険さらには社会保障と生命保険とが、競争的関係にありと把握せられているが、学界ではしからずとして、この両者は相互補完、共存共栄の関係にありとする見解もきわめて多く、しかして本書における著者の主張では、この問題を決定的に断定することは困難であり、また著者の主張のごとく、万人が本書からの結論をそのまま確信するとするには、いささか心もとない。著者は本書において、ただ断定されているだけであって、丹念なる理論的裏づけもないし、実証的証拠も不足である。

思うに、社会保険、社会保障の発達と生命保険の発展との関係は、これを結論づけてすべての人々を説得せしめるには、実証的な研究が是非とも必要なのではあるまいか。それは経済の成長率や貯蓄、投資などへの国民各人の収入の流れの程度、それに社会保険または社会保障の発達状況等と、生命保険の質量にわたる発展の実情を、それぞれに比較考案してみて、ここに結論を導き出すべきであろう。社会保険、社会保障が生命保険を圧迫するとかしないとかいっても、それは水掛け論に近い。また社会保険、社会保障の発達と生命保険の発展が、平行的に上昇しているとの立証をしても、これだけではまたこの問題に関しては無意味である。もし社会保険、社

会保障にしてなかりせば、生命保険はより以上に発展したかもしれないともいえるからである。また社会保険、社会保障の発達と逆行して、生命保険の発展が停滞し阻害されている実例すらもあるからである。しかして社会保険の誕生と成長が、保険そして生命保険への誤解と反感を解消して、きわめて好影響を生ぜしめていることも事実であるとするならば、ますます社会保険、社会保障と生命保険の関係を把握することは困難となり、これを解決するには高度の理論と広い視野に立つ綿密なる実証的研究によるほかはないであろう。

著者は「すべからく経済学は徒らに原理論にのみ終始することなく、まさに当面せる現代資本主義の分析にあてられなければならない」（序三頁）と述べられているが、まったく同感である。もっともこの文言のうちには、原理論軽視の意が含まれないものとしてであるが。確かに経済学は具体的問題を実証的に追求してのみ、その存在意義が生じてくるであろう。元来、実証的研究は労多く、日時を費すものであるが、保険経済学の基礎が、ようやくに固まりつつある現在、われわれはかかる研究方法にも着手すべきである。つまり保険経済学は、その創生期を経過して、新段階に入りつつあるとされるであろう。ここでは研究対象のみを、本質論や原理論より移すだけでなく、その論理の進め方や理論の立て方も、一般法則的であってはならないのである。著者は本書において保険経済学の新しい在り方をいわれてはいるものの、その内容はそれに則するとはなしがたい。

本書は、独占資本主義段階における保険を研究し、また保険の独占問題を研究している。この点はやはり本書の一大長所である。しかしながらその主張はいかにもマルクス経済学のお手本のごとく、劃一的であり機械的である。資本主義の現実の把握も形式的で、あまり最近の変貌や変質の事実を追求・分析もされていない。そして依然として一般法則的であり実証性に欠けている。この点は著者と本書だけは責められない。ほとんどのマルクス経済学者とマルクス経済書の等しく有する欠点であって、これの克服がすなわちマルクス経済学の新発足の契機となろう。

保険経済学は、きわめて多くの未開の分野を有し、その研究方法も確認されておらず、体系も調ってはいない。一方保険の現状・現実は、次々と重大にして困難なる問題を提起しつつあるのである。しかるに学界には保険技術論や保険法律論の領域にのみ閉込もって、経済学を理解しようとしない傾向も未だ存している。かかる時期に際して、きわめて濶達に保険経済学の構図を描き示してくれた本書は、やはり貴重なる書物であるとされるのである。

（著者は経済学博士、本書は序三～四頁、目次六頁、本文一～二〇七頁、昭和三十四年十二月五日、保険研究所、三九〇円）

（庭田　範秋）